

ミュージアム通信

お江戸の 歳末ジャンボ宝くじ -「富くじ」事情

[新商品のご紹介]

2009年12月1日～数量限定発売
小町紅『板紅』ざくろ

[かわら版]

江戸の化粧再現講座のご案内
寒中丑紅プレゼント



「隔田川雪見」(部分)・芳虎・国立国会図書館 所蔵

お江戸の歳末ジャンボ宝くじ-「富くじ」事情

一攫千金、庶民の夢が
詰まった「富」の札

「どうするんだい、おまえさん、呆れかえっちゃまうねえ。暮れの二十八日だというのに、仕事もしないでぶらぶらして、やれ、夕べこんな夢を見たらどうだとか、そんなことばかり言ってる……あんまり馬鹿馬鹿しいじゃないか」

「なに言ってるやがる、べらぼうめ、仕事しねえったつてな、富というものは、ひとつ当たりゃあ一夜のうちには大金持ちになれるんだ。だからよう、さつきも言った通り、おらあ、いい夢を見たんだからよ、今度はまちげえなく当たるんだから、なんとか一分だけ都合してくれよ」

さて。長くなつたが、これは落語「御慶」^{※1}の一幕である。本作では、年の瀬だというのに餅を買う金もない大工の男が、女房の

着物を質屋に入れて作った金で、夢占のお告げ通りに富札（江戸時代の宝くじ）を買い、見事千両の大金を当て、急に手にした大金に踊らされる様を滑稽に描き出している。当選がわかった男の動揺っぷりや、抽選会場のどよめきなど、本作は、江戸の人々が今日と変わらず宝くじに熱狂している様をよく伝えている。

このように、宝くじは現代に限った行事ではなく、すでに江戸時代に盛んに行われていたのである。富くじ・富札・富突などと称され、一攫千金の夢を見て、『御慶』の男のようになけなしの金を捻出してくじ（富札）を購入する者や、仲間同士で出資し合っつて札を購入する者も少なくなかった。

幕府公認博打「御免富」
富くじは、言うまでもなく賭博行為である。本

来であれば厳しく禁じられる行為であるが、富くじはその収益金を寺社の修復費や維持費に充当することを目的としており、

いわば幕府による寺社助成策の一環に位置付けられた公許の博打であった。これを「御免富」と言った。

御免富の興行場所は寺社の境内であり、最盛期（文化・文政の頃）には江戸で一か月に三十余カ所、連日のように興行があったと言われている。なかでも特



図①：『東都歳事記』より谷中感応寺の富くじの様子

に賑わったのが「江戸三富」と呼ばれた谷中感応寺（図

①）・目黒不動・湯島天神で行われた富くじだった。

富くじの形態―くじの販売・賞金システム

最盛期の富くじの光景は、幕末の風俗を記した『守貞漫稿』と、ほぼ同時期に刊行された地誌『江戸繁昌記』に詳しい。

まず、催主（寺社）が番号を記した紙札（富札）を販売し、これと同じ番号を記した木札を抽選用に用意する。札の売り場は、原則興行開催寺社の境内に限るとしたが、実際は市中の所々に札屋が存在した。札屋が扱った富札は、

定価―これは興行主によって異なつた―の何割増しかで販売され、時にはプレミアがつくような富札もあったという。なお、富札一枚あたりの平均的な値段は、当時の職人の日当（五百〜六百文程度・一文＝現在の貨幣価値で約十円）に相当すると

言われ、決して安くはなかった。

試しに、『御慶』の男が「二分」で購入した富札一枚の価値について考えてみよう。一分とは一文であるから、職人の日

当相当額を基準に考えた場合、大変に高額な部類の富札だったことが知られる。前述のように、数人でお金を出し合っつて札を購入する「割札」が行われたのも道理というわけだ。

さらに、富くじには当時にあつてすでに前後賞や組違い賞というシステム

ムが確立しており、現行の宝くじとの類似性が認められる。組番号は数字

のほかに、干支や春夏秋冬、松竹梅・鶴亀・福徳円満といった縁起の良い文字が選ばれた（図②・③）。

最高当選額は興行主によってまちまちで、大規模なものでは千両、小規模なものでは百両といった具合に開きがあった。ちなみに、一等当選者は、催主に百両、札屋に百両

納め、その他諸費用として四十〜五十両が差し引かれたので、実際に手に



図②：富札各種。組番号に、干支・梅・寿が使用されている（其角堂コレクション）

する金額は、例えば千両
当選の場合は七百両程度
だったという。



図③: 組番号の干支(子丑卯巳)のイラスト入り富札
(其角堂コレクション)

富くじの形態―抽選・ 当選番号発表風景

さて、富くじの抽選当日となれば、開催寺社の境内は群衆で溢れかえる。前掲『江戸繁昌記』によると、当日はおよそ次のような段取りで行われた(右頁図①『東都歳事記』の富くじの様子と照合するとわかりやすい)。

- ① 拝殿の上、二大柱の中間に、抽選用の箱を安置する。
- ② 階下に柵を設け、群衆が入れないようにすると共に、暴徒等の警備のため検使が立つ。
- ③ 世話人が立ち、箱の状態と元札(紙札と同じ番号を記した木札のこと)を検分し、元札を箱の中に納める。
- ④ 富くじ開始の合図である太鼓を打ち、僧による読誦(大般若経)が始まる。
- ⑤ 経が読み終わると、役人・世話人等でもって箱をよく揺り動かし、中の札をかき混ぜる。
- ⑥ 係の役人が長い錐を持ち出でて、箱の中央に空いた穴に突き刺し、元札を引き出す(この役は、小坊主など子供が務めるケースも多かった)。
- ⑦ 引き出した元札、すなわち当たり札の番号を大声で読み上げる。

以降、設定した当たりくじの数だけ、札を突き

刺しては番号を読み上げることを繰り返す。最後の突きを「突き止め」と言い、これがすなわち一等の当選番号となる。この瞬間、それまで当たり札が一枚一枚読み上げられるたびに「われつかえるような騒ぎ」であった場内が、「たちまち水を打ったように、しいーんとなる」。

「咳払いひとつする者も」いないという(『御慶』より)。場内に漂う独特の緊張感、そして富札を握り締め、固唾を飲んで見守る群衆の姿が目には浮かぶようだ。

もうひとつの富くじ・ 「影富」の誕生

富くじの流行に伴い、富くじの当選番号を賭けの対象とする「影富」が生まれた。要するに富札を買わず、間接的に富くじを楽しむというものだ。専ら江戸三富の一等が賭けの対象になったが、賭金は一〜二文程度、当たれば八倍になったという。

富くじ収益の実態

最後に、富くじの実際の興行収益について触れておこう。

基本的に、収益(総売上金)の60〜70%程度を賞金

に宛てるものだったが、これは富札が完売した場合である。札の売れ残りが多ければ、当然採算がとれないという事態になる。皮肉なことに、富くじの流行による興行回数が増え、却って札を売り捌けない事態を生んだ。

富くじの赤字傾向は強くなる一方で、一時は連日のように各所で催されたが、次第に撤退する寺社が増えていった。そうして、江戸庶民の代表的な娯楽文化のひとつであった富くじは、天保十三年(一八四二)、ついに全面廃止を迎えるのである。

【協力・資料提供】 其角堂コレクション

※1 『古典落語』(下)、興津要編 講談社文庫より引用。
※2 その他の有名な興行場所として、浅草寺・芝神明・茅場町天神・杉ノ森稲荷・根津神社・愛宕前薬師など多数。なお京都・大阪でも文政期に富くじが盛んに行われた。



札屋の見立絵。店の中には数種の富札が並んでおり、白旗稲荷・目黒不動・湯島天神の札が確認できる。
(国芳(2枚続・部分)・其角堂コレクション)

日本を代表する木版画家・立原位貫氏とのコラボレーション板紅 小町紅『板紅』ざくろ

二〇〇九年十二月一日 / 数量限定発売



〈小町紅『板紅』ざくろ〉18,900円(税込) / サイズ縦約9×横約5cm
※すべて手仕事のため、150個限定発売となります。

板紅とは、江戸時代の女性たちが愛用した携帯用紅入れです。このたび、日本を代表する木版画家・立原位貫氏とのコラボレーションにより、魅力溢れる逸品が誕生いたしました。シックな墨色の背景に、子孫繁栄の象徴である「ざくろ」が鮮やかな紅色で描か

れた本品は、立原氏が下絵から彫り・摺り全工程を一人でを行い、一点一点丁寧に仕上げたものです。江戸時代、木版で摺られた浮世絵は庶民が気軽に手にとって楽しめる、親しみある存在でした。浮世絵も紅も「生活に取り入れてこそ、良さがわかるもの」

という立原氏の強い思いにより、今回の制作が実現いたしました。板紅は、まさしく「懷中に携える小さな江戸文化」です。和紙の温かな質感溢れる木版画と紅が折りなす江戸美の世界を、この機会にぜひお手にとってお楽しみいただけます。

「木版画家・立原位貫プロフィール」

一九七六年より浮世絵版画の制作・研究を開始。江戸当時の手法、絵の具、紙を独学で研究し、再現性の高い浮世絵の復刻やオリジナル作品を制作している。海外の著名な博物館や美術館等の浮世絵の復刻も多数手掛けるとともに、浮世絵版画の色彩分析に関する研究論文を国際色彩学会にて、企業と共同で発表。また、ダイヤモンド社より『色彩から歴史を読む』を共同執筆。二〇〇八年、連作『竹取物語』が江國香織氏の現代語訳を得て、古典物語絵本『竹取物語』(新潮社)として出版。二〇〇九年国立歴史民俗博物館及びNHKの依頼により、『歌川国芳の浮世絵』(達男氣性競 金神長五郎)を復刻。その記録が、ドキュメンタリー番組として放映される。

Information

かわら版

講座のご案内

江戸時代の女性たちは、紅・白粉・墨で粧いしました。現代の女性がTPOに合わせて化粧をするように、当時の女性たちも、室内、屋外、季節、年齢など、様々な条件に合わせて化粧をしていました。当館定期講座の「江戸の化粧再現講座」では、当時の化粧書や美容指図書をもとに、化粧デモンストレーションを行います。

■「第7回江戸の化粧再現講座

～江戸のアンチエイジングと白粉化粧テクニック～

今回の講座では、江戸時代のアンチエイジング・美顔マッサージの手順と、白粉化粧のポイントや綺麗に仕上げるためのテクニックなどを学芸員の解説とともにご覧いただけます。初めての方にも解りやすい内容です。多くの方のご参加をお待ちしております。

要予約・定員各回15名・参加費無料

2010年1月30日(土) 第1回 午後2時～3時 / 第2回 午後4時～5時

※ご予約は紅ミュージアム(03-5467-3735)まで。

「寒中丑紅」をプレゼント

12/1～1/31の間、小町紅ご購入者に「寒中丑紅」にちなんで牛の置物を差し上げます。この機会にぜひお求めください。

*江戸時代、寒中に製造された紅は特に良質と言われました。紅屋は、寒中丑の日を特売日とし、景品に牛の置物を配りました。



Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアムのご案内

●開館時間 / 午前11時～午後7時 ●休館日 / 毎週月曜日 ●入場無料 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>